

チームワークが革新能力形成に及ぼす影響

竹下, 浩

<https://doi.org/10.15017/1785349>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 竹下 浩

論 文 名 : チームワークが革新能力形成に及ぼす影響

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、組織にイノベーションを可能にさせるために組織内チームが行う行動と、それらの行動を規定する心理的要因、成果としてのチーム及び個人の能力形成について説明できる統合的なモデルを構築し、事務職と生産工程からのデータを分析することで検証した。以下、本論文における各章の概要を説明する。

第1章では、まず組織においてチームが保有する能力が、企業の生存と発展に不可欠なイノベーションや、製造業の国際競争力の源泉となっていることを説明し、そのメカニズムを解明するという本研究の意義を示した。次に、組織心理学・社会心理学・教育心理学におけるチームの学習活動や成果に関する先行研究を整理した上で不足点を指摘し、統合的モデルの必要性を明らかにした。

本研究のリサーチクエスション（以下、RQと記述する）は、「チームワークの何が、組織的成果につながるのか？」である。文献レビューでイノベーションが組織管理的側面と技術的側面の2つで構成されることを示し、製造業と非製造業のデータを用いて分析する必要性から2つの下位リサーチクエスション（「rq1:事務職ではどうか」「rq2:製造職ではどうか」）を設定した。さらに、「チームワーク（入力とプロセス）によりチームと個人の能力（コンピテンシー）が形成される」というIPC仮説モデルの枠組みを提示し、チームレベルと個人レベルで検証することとした。

第2章では、事務職における「チームの学習活動」を規定する心理的要因を検討する。まず社会的アイデンティティ理論に関する先行研究を検討、理論的に仮説を構築する。そして東京の調査会社と協力企業11社から得られたデータ（43チーム、154名）で検証した。マルチレベル相関分析の結果、探索的学習活動とチームの革新力との間に強い正の相関が見られた。また、年齢・勤続年数・在籍年数と学習活動および革新力間の係数は、全て負であった。チームの社会的アイデンティティは、個人レベルと集団レベルで搾取的学習活動に異なる影響を与えていた。

第3章では、これまで未着手であった生産工程におけるチームワークの形成過程を説明する仮説的モデルを構築した。各地の工学系大学校6校で1年間（54単位、972時間）のものづくりPBLを体験した大学生13人からデータを収集した。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析の結果、チームで働くこと自体が成員の能力形成につながっていること、個人の能力の違いにより満足度に違いがあること、という2つの仮説が構築された。

第4章では、第3章で提示した仮説をチームレベルで検証する。ものづくりPBLにおいて、「チームで活動すること」自体が、仕事に必要な能力の習得をもたらすのか、だとすれば、チーム活動の諸要素は、どのように異なる経路で成果に影響しているのか、について検討した。工業系大学校3校で産学連携の分業制課題解決型授業（972時間）を修了した4年次学生157名から質問票で回収したデータを因子分析及び構造方程式モデリングで分析した結果、(a)チームワークの心理的・行動的要素は職業能力開発感に正の影響を与えていた；(b)チームワークの心理的要素（5つの下位尺

度)は行動的要素(3つの下位尺度)に異なる影響を及ぼしていた。

第5章では、第3章で提示した仮説を個人レベルで検証した。研究1では、ものづくりPBL版個人のチームワーク能力測定尺度を開発し、1年生から4年生(N=214)から得られたデータを因子分析および1要因分散分析を行うことで、チームで作業する経験が個人の能力形成に及ぼす影響を検証した。結果、4年生群の平均値が全ての項目で3、2年生群よりも、日程費用管理で3、2、1年生群よりも有意に高かった。記号化と自主を除く全項目で4年生群の平均は最も高かった。これらのことから、仮説1(ものづくりPBL経験者は未経験者に比べチームワーク能力が高い)は部分的に支持された。

研究2では、ものづくりPBLを修了した学生(N=46)のスキル水準の違いによってものづくりPBLの満足度が異なるかどうかを検証した。相関分析の結果、技術的スキルと個人的満足度に負の係数、知的・対人的スキルと個人的満足度に正の係数の、部分的な相関関係あるいは傾向が見られた。各スキルと集団的満足度との相関係数は負の方向であり、一部に有意な関係が見られた。これらのことから、仮説2(個人スキル水準の違いによってものづくりPBLの満足度が異なる)は部分的に支持された。

第6章では、まず第1章から第5章までを要約した。次に下位リサーチクエスションであるrq1とrq2の観点からの発見事項と、そこから導かれる本研究の総合的結論について述べた。そして第1章でレビューした各領域に対する理論的貢献を考察した。最後に、提言と実践的含意を整理した。